

私の回顧録

小島 二郎

丸善薬品青島出張所の所長は寺田さんと言った。その寺田さんが、昭和十八年の秋近く日本への出張の帰りに、二人になつたきくと長男を伴つて、神戸港から青島へと

連れて下さつたのである。かくして、三郎一家三人は、海岸に近い山東路三十六号に細やかなひと間の家庭を持ったのである。戦争は、日に日に

そして、二十年三月には次男が生れた。が、戦局はいよいよよきびしくなり、沖繩が落ちた頃から婦女子は少しでも北へ、と言つて天津出張所へ疎開することになつた。男だけが青島に残つたのである。

天津は、石川さんが所長でやつておられた。が、やがては敗戦となり。あの八月十五日、終戦の日を迎えたのである。そして、在留邦人は全部日本へ引き揚げることになつた。三郎はその秋、海路天津に渡り、家族と合流して引き揚げの順番を待つことにし、翌年の春、天津貨物館に集結、塘沽港から米軍の上陸用舟艇に乗って佐世保港へ、無事引き揚げる事ができたのである。が途中船内では、栄養失調で乳飲み子が次々亡くなつたりし、ひやひやしたものであった。佐世保では、一人千円ずつもらつたのをおぼえている。四千円と手

塗料の仲買人大阪で 昭和23年、初の城を持つ



昭和24年頃の三郎と4人の子供。後列左は、現株イワサの岩佐晃一社長

と共に太郎の引き揚げてくるのを待っていたのである。従つて三郎親子は、取敢えず三重県の榎本へ落着き、白子で仮住いの一間を借り、そこから加佐登によろやく、一軒の住いを見つけた。そして、四日市の大協石油へ働きに行くことにしたのである。が当時は、配給だけではとても食べていけない時だけに、暇をみては、



昭和24、5年頃創業時代の正月風景、三郎ときく4人の子供

榎本へ手伝いにいき、かぼちゃに野菜、芋など足してもらつたもので、田植を初めて経験したのもその頃だった。そんなことで、百姓が一番、羽振りよかった時代でもあった。かくするうち、三郎弟の輝夫が尋ねて来、父が来て、兄太郎が死んだので兄嫁は九州へ帰した。で、三郎一家は大阪へ出てこないかと言つたことになつたのである。

聞けば、父が、奉天省清原の兄太郎の処に寄宿していた時に知り合つた。清原県庁の隣だった。清原の院長さんと、米原でパツタリと出合い。太郎の死を知らされたからであった。この院長が、太郎の死亡診断書を書いたと言つた。かくするうち翌二十二年には三男が生れ、その翌年の二十三年には、新今里八丁目の中川本通り、初めて自分の城を持つことができたのである。土地二十七坪に間口

を元手にして塗料、薬品のブローカを始めた。草分けである。当時は、極端に物不足の時代、商品さえあればなんでも売れたもので、この生野区には、ゴム工場など小企業が多く、そんなことも幸が、きく三十二歳。小島塗料、創業の幕明けになつたのである。

亡き妻の冥福を祈りつ妻に捧げる回顧録である
(小島塗料取締役会長 (おわり))